

もつひろのフィールド

緒方しらべ
おがた
総合研究大学院大学博士後期課程

降りつづける雨、照りつける日差し、鳴りやまないクラクション。バスを乗り継いで、バイクタクシーにまたがって、でこぼこの道を歩く。通りを行く人たちとの際限ない挨拶、店番のおばさんの掛け声、住宅地で遊ぶ子どもたちの騒ぎ声。ナイジェリアの地方都市イレ・イフェ



筆者のフィールド、ナイジェリアの地方都市、イレ・イフェ

でアーティストたちを訪ね歩くこと、それがいつものフィールドワーク。看板、広告、絵画、彫刻、版画、ビーズ細工、壁画、染織、陶芸など、さまざまな「アート」を手がける数十人のつくり手たちの仕事場や自宅を訪れる。彼らにインタビューをして、作品の制作過程を記録したり、お客さんとのやりとりを見つめる。家族や近所の人たちと話をし、日常のたわいない出来事を書きとめる。雨の降りやまない日には、雨足が遠のくのを何時間でも待ってやっと出かける。つくり手の数、作品の種類、「アート」のいろいろ、街の広大さ、そして遅々としてすすまない調査——どれをとっても、フィールドは果てしなく広い。

いつものフィールドを離れて

雨季真っ盛りのナイジェリアをあとに帰国すると、日本は一滴の雨つぶさえ落ちてこない猛暑のお盆。そのころ、わたしが所属する大学院の研究科がおかれている民博は特別展の開幕を目前にひかえていた。二〇一〇年九月から一二月まで開催された、『彫刻家エル・



屋外で大型の木彫を制作するイレ・イフェの木彫家たち

アナツイの「アフリカ」。この展示は二〇一一年二月から同年八月にかけて、神奈川、山形、埼玉の美術館を巡回する。これまで、アフリカン・アートの展覧会といえば、数名のつくり手たちの作品を「アフリカ」としてひとくくりに展示することがほとんどであったから、ブラッ

ク・アフリカの特定のアーティストの作品がこれほどの規模で展示されるのは、日本はもとより、世界でもはじめての画期的な試みだろう。この展示を企画した民博の川口幸也実行委員長は、すでに一五年まえに着想し、二年まえから具体的な準備をはじめていた。その最後の七日間、わたしは撮影担当者として展示場で過ごす機会にめぐまれた。

白い壁に囲まれた場所

開幕七日まえ、作品の詰められたいくつもの木箱が開かれると本格的に設営がはじまった。「博物館」が「美術館」に変身したかのような錯覚をおぼえさせる白い壁と床。ひととき目立



作業4日目、展示空間がしだいに創られていった

つブルーシートのうえを、搬入・設置スタッフ、内装スタッフ、そして実行委員たちがあわただしく駆けまわっている。現場に立ち会う展示担当の職員や特別展準備室のスタッフも、その動きを見守りながら、適宜、手を貸す。小さな金属片がつなぎ合わされてできた巨大な彫刻を、何人ものスタッフが全身で支えながら、少しずつ、白い壁に掲げてゆく。来日していたエル・アナツイ氏の指示で、「金属の布」にひだがよせられる。やり直しをくり返ししながら、ひだはねじで慎重に固定された。それらはすべて、アナツイ氏がこの空間でのみ思い描いてかたちにした唯一のものばかり。次の会場へ行っても、まったく同じかたちは創りだされない。作品を説明するパネルやラベルの位置も、そこに当てられるライトの向きも、ひとつひとつ、正確に定められていく。

背後から出される指示の声、真横である掛け声、響きわたる電動ドリルの音。頭上で行き交う脚立、床に散らばる軍手、ちぎれた銅線、端に寄せてある木箱と大工道具。白い壁で囲まれた慣れない場所で、カメラを抱えたわたしの足もとはおぼつかない。不安にすらなるこの空間で、川口実行委員長にたずねてみた。「抜け出したくなりませんか？ここでずっとそうしていらつしやって……」

「え？全然そんなことない。これがフィールドワークみたいなもんだから。会議で座ってるよりよっぽどいいよ」
そこにずっといても平気そう、というよりは、



アナツイ氏、川口実行委員長、展示スタッフが作品を設置する

そこでこそ生気に満ちている様子で即答が返ってきた。そしていつの間にかわたしは、たしか緊張感を感じながら、ファインダーに目を押しあててこの現場を撮りつづけていた。

そこにも

狭くて白かった場所は、緊迫した空気のなかで、日を追うごとに色彩を帯びていった。彫刻の凹凸と照明がつくる光と影、アーティストと作品の背景描写で、空間はふくらんでいった。そこにはいつも物音が、人の声が、響いていた。多くの人たちによって展示場は創られていった。そこを生き生きと駆けめぐる人びとの姿に、わたしはもうひとつのフィールドを見た。